

京都市 谷口一朗

今回の公開事例研究会を企画させていただいた意図も含め当日の感想をいくつかコメントさせていただきます。

案内にも記載させていただきましたが、京都の新しい景観政策がある意味ものすごい評価を受けており、京都のまちづくりに関わる一員としては非常にうれしい反面、非常に危険性を感じています。まさに京都が京都であり続けるためには「景観」はその存在意義そのものにも関わってくる大きなテーマであると思います。ただし、この「景観」というものは、あくまでもまちの表情であり、そのまちそのものが元気であって初めてその表情も生き生きとしたものになるのではないかという想いを強く持っています。

また、京都のプライドであるとともに、大きなアイデンティティの1つとして、「本物」ということが挙げられると思います。このことから京都は単にまちのうわべの外観だけではなく、そのまちそのものを景観の要素ととらえるべきだと思っています。

そのためにも、京都の景観には、行政側からの規制等の政策だけではなく、市民主体の自らの意思による動きが重要であり、この動きとの相乗効果によりはじめて京都らしい景観の保全・再生・創造が生み出されると考えています。

今回の公開事例研究会では、このような問題意識から、京都市での新しい景観政策及び京都市都心部での住民主体の景観・まちづくりとして明倫学区の事例を取り上げ、今後の京都の景観のあり方を是非参加者の皆さんとともに考えたいという意識で企画させていただきました。

今回の研究会で改めて京都市の新しい景観政策の全容の説明を聞いてみて、やはり率直な感想として「すごいなあ」という一言につきると思います。と同時にやはり何としても今回をきっかけに、京都のまちの景観がよくなる方向に向かうように皆ががんばらないと、という思いを強く持ちました。

また、明倫学区の取組からは、京都のまちの底力というか地力を感じたように思います。「我々のまちは我々で守る」という言葉で言えばいとも簡単ですが、実践しようと思うとこんなに難しいものはないということ、いとも平然とされていることには驚かされるばかりです。ただし、京都もこのような活動ができる地域ばかりではなく、特に「景観」という切り口での住民主体の活動は非常に難しいものがあります。ここをどういう風に多くの地域に広めていくことができるのかが今後の京都の景観まちづくりにとって重要ではないかと思います。

最後に、今後とも京都のまちづくりに関わるメンバーとして、100年後に今回の動きが京都の「景観」の大きなターニングポイントになり、いつまでも京都であり続けられたと言ってもらえるようにがんばりたいという決意でしめくりたいと思います。